

研究・調査報告書

報告書番号 1 8 3	担当 独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
Craving for alcohol in the rat. Adjunctive behavior and the lateral hypothalamus. ラットのアルコールへの渴望、随伴行動と視床下部外側野	
執筆者	
Wayner MJ.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Pharmacol Biochem Behav. 2002, 73(1):27-43.	
キーワード	
アルコール依存症、視床下部外側野	
要 旨	
<p>以前の研究からラットを用いてアルコールによる随伴行動を測定する Falk モデルは人間のアルコール依存症を表すモデルとなり、過剰なエタノールの消費を誘導するのに適当であることが報告されている。本研究では Falk モデルを用いて、ラットに様々な味溶液を 6-8 ヶ月与えることによるアルコール摂取量やその後のアルコール依存症における初期段階の味への関与について検討した。その結果、甘い味は常習が起きる初期段階ならびにアルコール退薬症状時にエタノール消費の強化に有効であることが示された。エタノールの自発的な摂取はアルコール依存症が進むまでの初期過程であり、一般的な環境や他の実験状況は過剰な行動を引き起こす。これまでにアルコールに伴う随伴行動、脳の電気刺激、塩の摂取覚醒は詳細に調べられており、視床下部外側野の中の細胞が非常に化学的感受性が高く、血中の浸透圧や体液の正常な調節における飲水の開始に重要な役割を果たしていることが明らかとなっている。少量のアルコールはこれらの細胞に直接的な効果を持っており脊髄の運動神経へも投射し、脊髄反射の興奮レベルを調節し、環境刺激に反応していることから、口から到達する味と他の感覚情報は、これらの神経細胞体を活性化させ、味覚感覚情報やエタノールの過剰な消費や渴望を生み出すことによりおこる運動覚醒相互作用を生み出すと考えられる。</p>	